

LFA通信 特別号



◆今回お送りしているもの◆

- ・パンフレット2020年度版
- ・LFA通信特別号
(皆さまへ感謝のメッセージ/2019年度活動報告/LFAメディア情報)
- ・LFA大感謝祭のご案内
- ・リーフレット2部

リーフレットのご活用方法

パンフレットとともに、リーフレットを部同封しております。
ご家族やご知人にLFAをご紹介いただく際にぜひご活用いただけますと幸いです。

いつも温かいご支援を誠にありがとうございます。
引き続き皆様と子どもの貧困の解決に向けて
一緒に進めてまいります。

いつもLFAにご支援いただきありがとうございます。
新型コロナウイルスの影響を受け、子どもを取り巻く
環境は、さらに厳しくなっております。
LFAはこれまでに以上に支援に力を入れ、
この状況を乗り越えていきたいと考えています。
引き続き、温かいご支援のほど、よろしくお願い致します。

代表理事 李炯植

いつも Learning for All を支えて頂きありがとうございます。
新型コロナウイルスの影響を受け、困難を抱える
子どもたちの環境はより一層厳しいものになっております。
これまで以上に包括的な支援を継続する事の重要性を
痛感しております。

くじけそうになる事があったとしても続けなければならないのは、
大勢の仲間と共に支え合っており、勇気をもって進みます。
子どもが全国に心を寄せて頂き、皆さんに「思い」を
述べて頂きありがとうございます。

「子どもの貧困に、本質的解決を。」

ミッション実現に向け、これからも一歩に多くを学びたいです。
引き続き、よろしくお願い致します。

コミュニケーション部 李炯植
石神 駿一

サポーターの皆様、いつもご支援いただきありがとうございます。
コロナ禍の現在、子ども達の置かれている現状はより一層不安定で、
継続的に支援を続けることの大切さや価値があります。
これまで理不尽が起これば、希望な人生を歩める環境を、
整えるのが、私たちの役割だと思っています。
どうかこれからも力を貸して下さい。

一緒に、「子どもの貧困に、本質的解決を」実現しよう。

子ども支援事務局 事務局長 入江 亮

コロナ禍で子ども達を取り巻く環境も
大きく変化し、試行錯誤の毎日ですが、
皆様からの温かい支援に、

いつもパワーを頂いております。ありがとうございます。

今後も、「子どもの貧困」という社会課題に対し、
子どもを取り巻く環境を少しでもおのりして生きよう
と誠心誠意、取り組んでまいります。

今後ともよろしくお願い致します。

経営管理部 メネージャー
辻 珠美

いつも温かいご支援を誠にありがとうございます。
引き続き皆様と子どもの貧困の解決に向けて
一緒に進めてまいります。

いつもご支援頂き
びより感謝申し上げます。

コロナ禍で皆様におかれましては
大変な中、お寄せいただく
ご寄付やメッセージにいつも励まされて
おります。ありがとうございます！
今後とも皆様と一緒に、
子どもたちに支援を届けていきたいと
思っております。

どうぞよろしくお願い致します！
コミュニティ推進事業部
吉山

いつも温かいご支援を頂き、
言成にあつかわりありがとうございます。

4月からオンラインイベントの運営を行っておりますが、
サポーターの皆様のご支援のおかげで、
和らな学生は子どもたちに希望を届けること
も改めて実感し、身のうちは頑張る思いです。

今後ともイベントを通じて
皆様とお会いできることを楽しみにしております。

コミュニティ推進事業部
インターン
菊池 舞

いつもあたたかいご支援ありがとうございます。
コロナ禍で、誰もか不安を
抱える中で、子どもたちの支援をし
てくださる皆さまのことも、本当に心強く
感じています。

ぜひ直接お話を聞いてほしいです。
10月1日の6周年記念イベントに
ご参加いただければ幸いです！

コミュニティ推進事業部 小笠 勇子

いつもご支援ありがとうございます。
LFAの学生インターンとして皆様と触れ合う中で、
本当に沢山の方々に支えられているのだと
身を持って実感するようになりました。
皆様の「これからも応援しています！」というお言葉が
何よりも心強く、日々活動を頑張ろうと思える
原動力です。

これからもサポーターの皆様と一緒に
進んでいくことができれば幸いです。

コミュニティ推進事業部
インターン 秋山 萌々音

いつもご支援下さり、ありがとうございます。
サポーターの皆様のご支援のおかげで、
子どもたちの未来のために正面から向き合
い、頑張ることに感謝の気持ちでいっぱいです。
今後とも皆様に寄り添いつつ、活動をし
ていくことができれば幸いです。

コミュニティ推進事業部
インターン
田中 真尋

最後に最近の情報も
載せています！



子どもの貧困に、本質的解決を。

Learning for All 2019年度活動報告

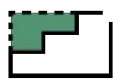
日頃より Learning for All へ温かいご支援を頂き、誠にありがとうございます。

今回の活動報告では、

- ◇2019年度 学習支援事業の活動報告
 - ◇2019年度 居場所支援事業の活動報告
 - ◇2020年度 最近のLFA情報
- についてお届けします。

サポーターの皆様のおかげで、子どもたちに温かい支援を届けることが出来ております。
引き続きのご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

Learning for All



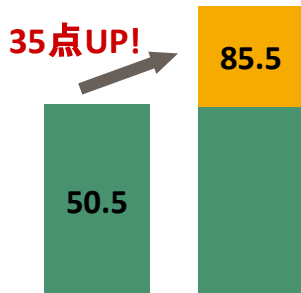
学習支援事業(2019年度)

964人
の子どもを支援

514名
の大学生が参加

※支援した子ども・大学生の人数はそれぞれ2019年度の延べ数

子どもたちに届けた成果



↑某拠点中1対象
プログラム前後に実施した
英語のテスト平均点の推移

経済的に困難な状況にあったり、学習遅滞を抱えていたりする子どもたちに対して、学習支援を実施。

成果として、都内の某中学校拠点では、3ヶ月の学習支援プログラムの前後で11名の中学1年生の平均点が数学で33点以上、英語で35点も上昇しました。

また、受験を迎えた中3生からは続々と合格報告が届きました！



📖子どもたちの変化



高校1年 Wくん

自己肯定感が低く、自分に対してネガティブな発言が多かった高 1のWくん。LFAの学習支援には長く通い続けており、**一緒に高校受験を乗り越えました**。高校生になった彼に、当時の受験の話をする「あの時は頑張った」と少し誇らしげに話してくれました。LFAでの学習支援が、**自分を認められる経験の一つになった**ことが分かります。

中3のEさん。小4から不登校で、中学はフリースクールに通っていました。彼女は受験生でしたが志望校は無いと言っていました。しかし、ある日志望校を教えてくれ、その高校の受験の特性も知っており、「**その高校の受験対策をしたい**」と話してくれました。当初は勉強への意欲が高いとは言えない生徒でしたが、**教師との関わりや本人の日頃の努力**で、受験生としての自覚が芽生え、**前向きに勉強に取り組むよう**になりました。その結果、無事**第一志望の高校への進学を果たしました**！



中学3年 Eさん

📖プログラム参加学生の声



目の前の子どもと、遠かったはずの社会課題を同じスコープの中で捉えることで、**社会課題への当事者意識**を持つことができました。机の上でペンを動かしているだけでは見えない、**現場で奔走するからこそ得られること**だと思います。（湯川さん）

※インタビューはこちら→

<https://learningforall.or.jp/topics/interview/student0406/>



LFAのボランティア教師としての経験は、**学校教育における子どもの支援について考えるきっかけ**になりました。今は、学校以外での子どもの支援についての勉強に励んでいます。学校ではまかなえない支援をすることで、**子どもの人生の幅を広げる活動**ができたかと考えています。（石橋さん）

※インタビューはこちら→

<https://learningforall.or.jp/topics/interview/student0530/>



居場所支援事業(2019年度)

72人
の子どもを支援

123人
の大学生が参加

※2019年度に支援した子どもの実数・大学生ボランティアは延べ数

様々な事情から学校や家庭に安心して過ごす環境が整っていない子どもに対して生活基盤を整える支援を行なっています。また、保護者様にも学童通信や保護者会を通じて、家庭全体のサポートを進めています。2019年6月には中高生向け居場所支援拠点を開設し、18歳までの子どもを対象に多面的な支援ができるようになりました。



⇒子どもたちの変化

父子家庭で末っ子のAさん。拠点に通い始めた頃は他人への関心が薄く、一人で活動することが多い子どもでした。一方で好奇心が旺盛で、遊び方を考えたり何かを組み立てることに熱中して取り組めます。そこで彼女に**居場所の友達やスタッフにアンケートをとって次の週の集まりで何をするか考えてもらい、彼女がワクワクして拠点の子どもやスタッフと一緒に取り組めるように工夫しました**すると、自らスタッフや友達に対して質問をするようになり、表情が豊かになりました。今では皆で集まる時間に積極的に司会を務めるようになったり、友達の意見をしっかりと聞いて思ったことを自分の言葉で話せるようになりました。



小学低学年 Aさん

⇒プログラム参加学生の声

居場所拠点では子どもの送迎で、保護者の方とお話しします。支援を始めて半年経った頃、子どものご両親が私たちに心を開いてくれたことがきっかけに、**子どもが一番深く関係し、影響を受ける親への支援をする必要がある**と感じました。子どもは、親をロールモデルにするからこそ、1人の大人として親に寄り添う支援を続けることは、**子どもの成長へつながる本質的な支援である**と思っています。（大里さん）

※インタビューはこちら→

<https://learningforall.or.jp/topics/interview/student0409/>



2020年度 最近のLFA情報

LFAコミュニティ

ご支援いただいた企業

32社

サポーター

1434名

※2020年8月20日現在

LFAはマンスリーサポーターの皆様をはじめ、サポーター企業やアラムナイ（現在は社会人として活躍している元FAのボランティア）など、多くの方から支援して頂いております。LINE@では、定期的にLFAから情報発信を行っております。右のQRコードからぜひご登録ください！

LINE@登録



※LINE@はこちらからもご登録いただけます→<https://lin.ee/u2v5POw>

☞ サポーターの皆様と一緒に！

2020年1月には、株式会社イデアル様のご協力のもと、有志のサポーターの方々と一緒に居場所拠点のリフォームを行いました。また、4月からは定期的にオンラインイベントを実施しており、そこでのご意見を元に現在、感謝祭やオンラインでの交流会の企画、グッズ作成などLFAコミュニティを盛り上げる企画も有志の方々と共に進行中です。今回の新パンフレットの封入作業もサポーターの方々にご協力いただきました！



☞ クラウドファンディングを実施しました

2020年5月22日～7月5日の期間に、新型コロナ緊急支援プロジェクト(下記参照)の為に資金調達としてクラウドファンディングを実施しました。当初の目標金額だった1,000万円を達成し、最終的に約1,240万円のご支援をいただくことが出来ました。サポーターの皆様にも多くのご支援をいただき、改めて感謝申し上げます。

ナレッジ展開のページ登場！

今年6月にLFAの「E-learning」「教材」「研修」等のノウハウを提供する「ナレッジ展開事業」のページをHP上に追加しました！ぜひHPのTOPページ右上からご覧ください。



新型コロナ緊急支援プロジェクト

子どもや保護者様を対象にしたアンケートをもとに、2020年12月までに

- ①生活物資支給
- ②保護者の相談支援
- ③オンライン・オフライン学習支援
- ④全国学習支援NPOノウハウ発信を実施予定です。



※オンライン支援の様子

【Learning for All メディア掲載実績一例】

令和を拓く どうする？新時代

漫画家 浦沢直樹さん

想像すること 私たちの使命

時代を映すモノヤコト

人口と高齢化率

年代	人口 (万人)	高齢化率 (%)
1960	9130	5.3
70	1億467	15.6
80	1億1706	24.2
90	1億2361	25.9
2000	1億2693	27.7
10	1億2806	28.6

成熟社会のカタチ

平成世代の夢

1970年から2025年へ。約半世紀を隔った大坂への万博開催は、時代を隔る世代の交代に象徴される。未来を創る若者の挑戦は、

貧困解消

子どもの貧困に取り組み、PO法人「Learning for All」代表理事の李炯植さん(29)「学費・上は経済的」「下は精神的」ジャパンを築く若者の世界を変える30歳未満の若者の一人だ。子どもが自ら人生を切り拓く「学習」

に加入、生活習慣を身につけて、親から子への「貧困の連鎖」を断ち切る。自立した若者が、社会の未来を担っていく。

↑読売新聞 特別面(2020.01.07)
 「令和を拓く」というテーマで、漫画家・浦沢直樹氏などと共に読売新聞の 新年特別面にLFA代表・李のインタビューが掲載されました。
 「平成世代の夢」という未来を創ることに挑戦する若者のひとりと紹介されています。

すべての子どもたちの可能性を育む
 「学びと暮らし」の伴走者

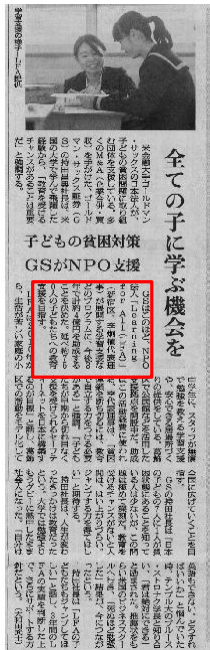
李 炯植 27 Learning for All 代表理事

兵庫県尼崎市、生活保護世帯の多い集合団地で育った李は、その環境から思い知られた。家庭の貧しさが子どもたちの学習形成を困難にし、それが就職につながら、やがて貧困が再生産されていく事実を。そんな貧困の連鎖を断ち切るために、彼が代表理事を務める Learning for All は貧困世帯の子どもたちの学習支援に注力してきた。だが、活動のなかで李は「学習支援だけでは足りない」と気づくことになる。学習以前にある生活習慣や愛着形成の問題。子ども一人ひとりの「家庭の事情」全般



↑Forbes JAPAN (2018年10月号)
 世界を変える30歳未満の若者たち30人
 「30 UNDER 30 JAPAN2018」に李が選出されました

↑日テレNEWS24「The social」(2020年1月27日)
 代表李がコメンテーターとして出演しました



↑朝日新聞(2019.01.24)
ゴールドマン・サックス様がLearning for All への支援を決めたことが掲載されました



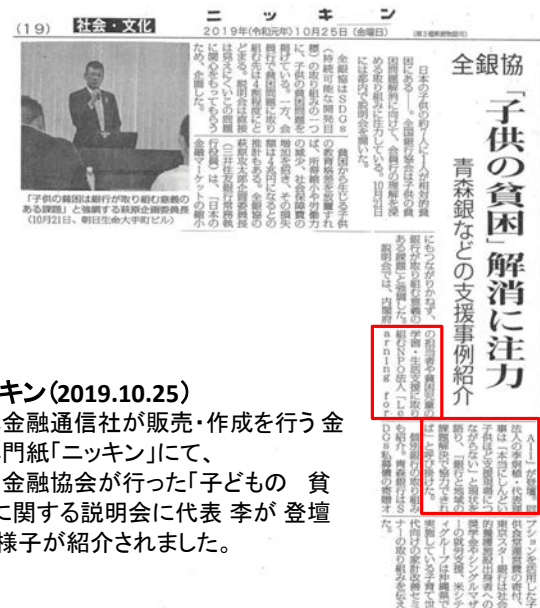
↑朝日新聞(2019.10.02)
代表の李と映画監督の是枝裕和氏、編集者の岸優希氏の3名で行われた対談記事が掲載されました



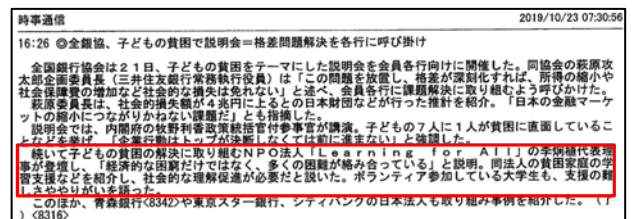
↑NewsPicks(2019.07.08)
7月8日(月)から12日(金)までの5日間、ニュースメディアNewsPicks人気シリーズの「Innovators Talk」にて、代表の李へのインタビューが連載されました。



↑日本経済新聞(2019.08.29)
ゴールドマン・サックス証券の持田昌典社長のコラムにて、Learning for All が紹介されました。



ニッキン(2019.10.25)
日本金融通信社が販売・作成を行う金融専門紙「ニッキン」にて、全国金融協会が行った「子どもの貧困」に関する説明会に代表 李が登壇した様子が紹介されました。

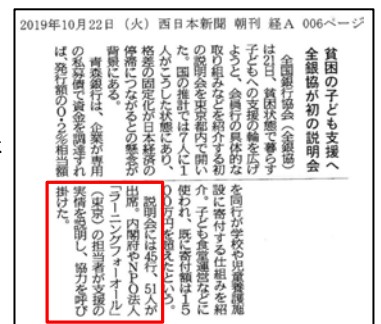


時事通信(2019.10.23)↑

西日本新聞(2019.10.22)→

「ニッキン」同様に、代表 李が登壇した全国銀行協会で行われた説明会の様子が掲載されました。

さらにこの全国銀行協会の説明会に李が登壇した様子は「金融経済新聞」「中国新聞」「岩手日報」など、新聞を中心に全部で14媒体に掲載されました。





7人に1人の子どもが貧困世帯で暮らしていると言われる日本で、教育格差を終わらせるためには「貧困の連鎖」を断ち切らなければいけない——。李炯植が代表理事を務めるNPO法人 Learning for Allは、すべての子どもたちの可能性を育むための学びと育ちを支えている。彼を突き動かす原動力と、Learning for Allの目指す「学びのあるべき姿」を聞いた。

見つける、繋げる、支援する

——李さんが代表を務められているLearning For All（以下、LFA）とは、どのような活動をしている団体なのでしょうか。

LFAは一言で言うと、学習や生活面、発達に困難を抱えた子どもたちの自立のために活動している団体です。もとは認定NPO法人Teach For Japanが2010年に始めた「学習支援事業」という事業でしたが、2014年にNPO法人として独立しました。

現在LFAで行なっている事業は、主に2つあります。1つは、Teach For Japanのころから取り組んでいる「学習支援事業」です。経済的な要因で困難を抱えている子どもたちを対象にした、無料の学習支援教室を運営しています。単に勉強を教えるだけでなく、学習指導を通して子どもたちに夢や学ぶ目的を見つけてもらって、「貧困の連鎖」に巻き込まれないよう自立していくことを支援しています。

——貧困の連鎖、というのは？

いま、日本では7人に1人の子どもが貧困世帯で暮らしていると言われています*。貧困の子どもたちほど家庭環境に恵まれず、学歴形成が難しい状況にいます。そしてそれは、将来の就職難に繋がっていくため、結果として貧困が再生産されていくサイクルが生まれているのです。

私は、彼らの学習支援をすることで、そういった貧困の連鎖を断ち切る力を育んでほしいと願い、大学生のころからLFAの活動に従事してきました。けれども、続けていくうちに「学習支援だけじゃ足りない」ということに気づいて。それで2つ目の事業として始めたのが「子どもの家事業」です。

子どもの家は、“子どもの自立する力を育む「家でも学校でもない第三の居場所」”というコンセプトの下、日本財団と共同で運営している拠点です。学童保育のような仕組みで平日の14～21時まで、主に小学校1～3年の児童20人程度を受け入れます。ここではケースワーカーなど専門家の協力を得ながら、学習面だけでなく生活指導や食事提供まで含めた、包括的な子どもの自立

※2015年に厚生労働省が行なった国民生活基礎調査によると、「子どもの貧困率」は13.9%。貧困率とは、所得（等価可処分所得）が国民の平均（中央値）の半分に満たない人の割合。相対的貧困率ともいう。

——これまでやられていた学習支援に比べると、かなり子どもの家庭にも入り込むような、胆力のいる事業ですね。それはやはり「そこまで包括的な支援をしないと、問題の解決に至らない」と思われてのことでしょうか？

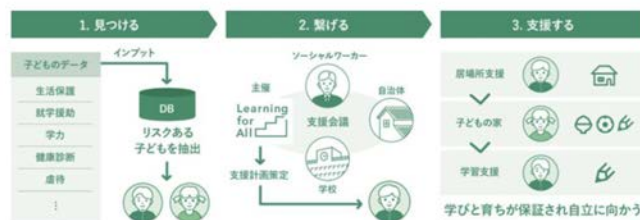
まさにその通りです。世間ではよく「学力低下は貧困が問題だ」と言われています。だから、彼らに勉強を教えてあげれば、問題は解決するのだと。私も恥ずかしながら、最初はそう思っていました。でも、LFAの活動を通して、それがミスリードだと気づいたんです。

「子どもの貧困」という言葉がありますが、実際は子どもたちが貧困なわけではない。家庭の貧困から生まれる諸問題が、子どもたちによくない影響を与えている、という構造なんです。そこには学力以前の段階で、ごはんを満腹に食べられていなかったり、親から十分な愛を注いでもらっていなかったりと、さまざまな問題があって。そういった複合的な要因が重なって、結果的に「勉強が遅れる」状況が生まれている。

だから、子ども一人ひとりの家庭にまで目を向けて、彼らが健やかに発達・成長できるような環境を整えていくことが、より本質的な支援になると考えています。いや、そうじゃないとダメだなと。

——そうした環境を整えるには、学校や行政との連携など必要になってきそうですね。

そのために、私たちは困難な状況にある子どもたちを「見つける」、彼らの支援に必要なステークホルダーを「繋げる」、居場所や学習機会を提供して「支援する」という3つの働きかけを大切にしています。これらを各地で持続的に行ない、地域全体で子どもたちの成長と夢を見守っていけるような「子ども支援の生態系モデル」を全国に広めていくことが、今後の目標です。



「子ども支援の生態系モデル」の3つのステップ

生まれ育った街で感じた「子どもと貧困」のリアル

——経済的に豊かな日本において、自国の貧困問題をなかなか身近に感じられない人も多いかと思いますが。そんな中で、子どもの貧困問題に興味をもったのには、何か原体験があったのでしょうか。

私の生まれた育った街が、経済的に豊かでない人たちが多く住んでいる地区だったんですよ。小学校のクラスの同級生の半分くらいがひとり親世帯で、生活保護をもらっている家も少なくなかった。ただ、当時はそこに問題があるなんて感じていなかったし、それが普通だと思っていました。

最初に違和感をはっきりと覚えたのは、高校生になってから、小学校の同窓会に参加したときでした。そこに来ている同級生たちの現状に、びっくりしたんです。高校を中退していたり、すでにとび職に就いていたり、妊娠している子もいたりして。

私はと言うと、小学校時代の恩師に「貴方は東大に行ける素質があるから、ちゃんと勉強ができる環境にいきなさい」と助言を受けたおかげで中高一貫校に進学し、それなりに勉学に励む高校生になっていました。中高一貫といっても当時は偏差値50以下で、受験さえすれば誰でも入れるような学校でしたけど(笑)。ただ、世間的に見れば「普通の高校生」に近い立場だったと思います。

——そこで自分と同級生たちの状況に、大きな差が生まれていることを感じたよ。

彼らとは数年前、同じ教室で同じ教育を受けていたんです。それなのに、どうしてここまで境遇が異なってしまうのかと、ショックを受けましたね。別に勉強ができるのが偉いとか、高校に行かないやいけなくて、そういう話ではなくて。ただ、学校からドロップアウトしてしまった同級生たちの話を聞いていると、進学した自分と比較して、彼らの人生の選択肢が大きく狭まっていることを感じました。

——ご自身が東大に行こうと決心したのは、恩師のアドバイスがあったから？

それも大きいですが、はっきりと決心したのは高校に入ってからでした。実は、高校2年生くらいのと時から持病のアトピーがひどくなって、1年くらい夜もほとんど眠れないような日々が続いたんです。その間、勉強くらいしかできることがなくて、半ばやけくそになって問題集なんかを解きまくってて。

それで、身体も精神もどん底まで追い詰められたときに、ポツと「よりよく生きたい」という願いが浮かび上がってきました。そして、そのために「東大に行くしかない」と思った。なぜ東大だったかというと、周りが「君は東大に行ける」と期待してくれていたんで、それに応えたかったというのが最大の理由です。

高校卒業までには体調も治して、東大にも受かる——この節目に、すべての不安要素と決別しようと奮起しました。ここで何かを妥協したり、諦めてしまったりしたら、以降ずっとダメになる気がして。そう決意したのが、ちょうど3年生になったころですね。そこから1年間は、受験に向けての対策を綿密にプランニングして、寝食以外のほぼすべての時間を勉強に費やしました。もう、働いている感覚に近かったです。

「バカだから仕方ない」に反論するために

——弛まぬ努力の末に東大に合格し、上京もされて、それまでと環境が大きく変わったかと思
います。当初の思惑通り、そこで「よりよく生きる」ための道は開けましたか。

いえ、実際はそうでもなくて。私にとって受験勉強は、定められた目標をクリアするためだけに膨
大な時間を費やす、単調でつまらないゲームのような感覚でした。それが大学でも「いいサーク
ルに入る」「いい評価をもらう」「いい企業に入る」と目標が変わっただけで、やることが同じように
感じられてしまって。入学してから2年ほどは、大学が面白いと思えず、講義にもほとんど出てい
ませんでした。

——地元との違いに、カルチャーショックを受けたことは？

周りの同級生たちの社会階層の高さに驚かされました。総じて“いいとこの子”が多くて、小学校
からずっと名門の私立校に通っている人や、お屋敷のような家に住んでいる人、帰国子女にも初め
て会いましたね。自分は血を吐くような思いでフルマソンを走ってきたのに、彼らは汗一つか
いていないように見えてしまって……やっかみなんですけど「何やコイツら、いい好かんわ」と思っ
てました(笑)。

ただ、私にとって身近な現実だった貧困を、彼らの大多数は遠い世界の話のようにしか思ってい
ないことには、やり場のない怒りのような感情を抱いていました。格差があるというよりも、自分の
生まれ育った街が、社会から切り離されているように感じられることが度々あったので。

——その断絶は、たとえばどんな瞬間に強く感じられましたか。

ある時、授業が一緒になったクラスメイトたちに、私の地元の同級生の現状や、自分の抱えてい
る問題意識を共有して「どう思う？」と聞いてみたことがあって。そしたら「それはバカだから仕方
ない」と言われたんです。

私は「それは違う」と言い返したかったのですが、根拠をうまく言葉で説明できなくて、とても悔し
い思いをしました。このときに感じたやるせなさや怒りが、いまの活動に至る大きな原動力になっ
ていると感じます。

その後、3年次で哲学者の金森修先生のゼミに入ったのをきっかけに学ぶ楽しさに目覚め、ひた
すら本を読み漁るようになりました。それまでは本なんて、参考書と『ハリー・ポッター』くらいしか
読んだことなかったんですけど(笑)。

——どんな本を読まれましたか。

哲学や経済学、教育学についての本を中心に、広く社会の構造を理解するうえで役立ちそうなも
のを読みました。さまざまな視点での世界の切り取り方を学んで、貧困問題を「バカだから仕方
ない」と言われたときに、ちゃんと反論できるようになるために。教育から子どもたちの貧困にア
プローチしていこうと思い始めたのも、ちょうどこのころからでした。

その中で「理論の勉強ばかりでなく、現場での実践も必要だな」と感じるようになって、大学3年の
終わりに、初めてTeach For Japanの活動に参加しました。そこからはもう、教育支援の現場につ
きつきりです。



感謝されない、当たり前にある存在になりたい

——LFAの活動で、とくにやりがいを感じる瞬間は？

未来に何の希望をもてていなかった子が、私たちのつくった教室に来て、学ぶ楽しさや意味を見
つけ、将来の夢や目標について話してくれるようになったとき、ですかね。

小学校5年生の頃からうちの教室に通ってくれている女の子がいて……ちょっと、その子の話を
してもいいですか？

——ぜひ、お願いします。

彼女は生活保護を受けている家庭の子で、初めて来たときは勉強もかなり遅れ気味、自信がな
くてほとんど感情を表に出さないような状態でした。でも、勉強自体が嫌いというわけではなく、
うちに通うようになってから熱心に自習して、少しずつ遅れを取り戻していきました。

中学生に上がると「英語の授業が楽しい」と教えてくれて。彼女の得意を伸ばして自信をつけても
らいたくて、英語がペラペラな大学生を講師としてつけました。

中学3年になると、彼女は自分で外国語の特進コースのある高校を見つけてきて「校区外だけ
ど、ここに行きたい」と宣言したんです。これまで以上に勉強を頑張って、見事その高校に合格
し、教室を巣立っていきました。

つい最近、大学生になった彼女に再会したんです。「来月から10カ月留学するんだ」と、楽しそ
うに話してくれました。とりわけ嬉しかったのは、彼女がLFAのことをあまり意識していないことでし
た。

——意識していない、とは？

過度に感謝されない、という感じですかね。感謝されないくらい、私たちの手がけているような支
援が、社会にあって当たり前になることが理想だと思っています。自転車の補助輪のよう
に、必要な人にとって最初は用意されて当然で、ひとりで進めるようになったら外して、そのうち
付けていたことなんて忘れる——そういう存在でありたいです。

すべての子どもには、無限の可能性があります。そして、幸せに生きる権利をもっている。どんな
に勉強が遅れていても、どんなに救いのない環境にいても、機会と期待を与えてほんの少し支え
れば、子どもたちは前向きに成長し、自力で明るい未来を切り開いていけるんです。その姿に、
たくさんの希望をもらってきました。

LFAはこれから子どもたちの支援を続け、彼らがもたらす希望の力で、この世界を変えていき
たいと思います。



李炯植◎Learning for All代表理事。1990年兵庫県生まれ。東京大学在学中、認定非営利活動
法人Teach For Japanの一事業であったLearning for Allに参画し、常勤職員として全国の学習支
援事業の統括業務に従事。その後、特定非営利活動法人Learning for Allを設立、同法人代表
理事に就任。「全国子どもの貧困・教育支援団体協議会」幹事。



【新】貧困の連鎖や教育格差をなくす、現代の「寺子屋」

独自の視点と卓越した才能を持ち、さまざまな分野の最前線で活躍するトップランナーたちが、時代を切り取るテーマについて見解を述べる連載「イノベーターズ・トーク」。

第198回（全5回）は、日本の子どもの貧困の解決を目指すLearning for Allの代表理事、李炯植氏が登場する。

7人に1人の子どもが貧困状態にある——。これが日本の話だと言われたら、耳を疑ってしまう人も多いのではないだろうか。

日本は豊かな国として認知されている。しかし、社会の側面に注目すると、実際には17歳以下の子どもたちのうち7人に1人が、貧困線以下の所得で暮らしている。

日本の子どもの貧困率は、OECD諸国の平均より高く、約280万人にも上る。

具体的には、例えばひとり親世帯の場合、月約14万円以下で暮らしている子どもたちがいる。

最低限の住まいや食を満たすことができたとしても、子どもの教育や将来への投資をすることは不可能に近い。

家庭環境などによって、子どもたちが必要とする学習環境が与えられない問題は、日本の経済にも影響を与える。

貧困状態にある子どもたちがそのまま放置され、十分な学習機会を得られずにいると、将来の国の税収や社会保険料収入が減少するだけでなく、生活保護や失業給付などの支出が増えることになり、その経済損失は約43兆円に上るとの試算もある。

この現状を打破しようと、貧困問題の解決を目標とする包括的な仕組みを作り上げようとしているのが、李氏だ。

貧困問題の解決を目指す仕組みとは果たしてどのようなものなのか。李氏の挑戦に迫った。

目の前の子どもの夢を大切に

——まず、Learning for Allの活動について教えてください。

李 私たちは「子どもの貧困に、本格的解決を」をミッションに掲げて、子どもの人生が変わる現場づくりを目指して、大きく2つ「学習支援事業」と「居場所支援事業」をしています。

学習支援事業は、週に2回、公民館や学校の空いている教室を拠点として、生活保護世帯など、家庭環境や学習環境に問題を抱えている小学4年生から中学3年生の子どもたちを対象に勉強を教える寺子屋です。



学習支援を受ける子どもとボランティアの大学生

2つ目の居場所支援事業は、小学1年生から3年生の子たちに、平日の放課後に安心できる居場所づくりを行っています。こちらは、学習の機会だけではなく、家庭で得られない基礎的な生活習慣やコミュニケーションなどを身につける場となっています。

学習支援には数人のスタッフがいて、居場所支援にも、経験豊富な保育士や児童指導員などのスタッフが入りますが、両事業とも、現場を支えているのは、ボランティアの大学生です。

1対1、または2対1で子どもたちと向き合うことになる大学生には、私たちが独自で開発した50時間にわたる研修を受けてもらいます。

また、常にスタッフが大学生にフィードバックする仕組みも作っています。

年間1000人もの大学生から応募があり、今は250人ほどの大学生が現場で子どもたちに向き合っています。これまでに延べ2000人ほどの大学生がボランティアとして参加してくれました。

組織づくりにも非常に重きを置いています。



李炯植（リ・ヒョンシギ）/ Learning for All 代表理事
兵庫県尼崎市生まれ。東京大学教育学部卒業。大学在籍時より非常勤職員としてTeach For Japanの一事業であったLearning for Allに参加。事業部長として東京・関西の事業部の責任者を務めた後、NPO法人Learning for Allを設立。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会幹事。

——李さんは、学生や社会人を教育の現場に派遣する「Teach For Japan」の一事業であったLearning for Allが、独立する時に代表理事に就任されました。まだ一事業であったLearning for Allに参加された時は、どのような状況だったのでしょうか。

李 Teach For Japanの事業として始まった2010年当初は、机の上が散らかったままで学習指導をするなど、どのような空間が子どもたちの学習に効果的なのかも、全く分かっていない状況でした。

子どもたちへの接し方も同様で、不適切な対応をして、子どもを泣かせてしまい、その子が来なくなってしまうこともありました。

そうした失敗を繰り返して、今があります。

学習の形も、今は教師1人に対し最大でも子ども3人ですが、当時は1対1もあれば1対6もあるなど、手探り状態でした。

そんな状況を変えたくて、私が入った2011年頃から、本格的に現場のオペレーションや教材の作り方を変えていきました。



子ども一人ひとりに最適化された教材（詳しくは、第二回）。

—どのような方針で、オペレーションや教材を変えたのですか？

李 目の前にいる1人の子どもから全てを考えて、その子が自立するため、そして貧困の連鎖に巻き込まれないようにするためには、どのような教室や支援があるべきなのかを仲間と議論しました。

教室の運営方法をはじめ、教材、教え方、教師に必要なマインドセットやスキルなどについてです。

つまり、目の前にいる1人の子どもを大切にすること、子どもを中心に据えることが、今も昔も変わらず大切にしていることです。

その時のチームで変えていったことがベースとなって、今の形となっています。

そして、子どもたちの状況から我々スタッフ一人ひとりが学習を重ね、組織の在り方自体も変えています。

組織としては、個人、チーム、そしてLearning for Allという組織全体、この3つが常に学習し続け、問題解決のために変わり続ける「学習する組織」を目指しています。

現在も新しい取り組みを進めていますが、事業を進化させる時にも、この組織の在り方は団体の基盤として生きています。



激しい憤りを覚えた東大生活

—そもそも李さんがLearning for Allを始めたきっかけとは？

李 少し長くなりますが、私の原体験に遡ります。

私は兵庫県尼崎市出身で、貧困率が高い地域に生まれました。うちも決して裕福な家とは言えませんでした。

家の近くにはビニールシートで作られた家がありまして、真冬に学校に向かっている途中、ホームレスの方が凍死して救急車で運ばれていくのを見たこともあります。

そうした場面に遭遇することは、1度だけではありませんでした。

そのような地域で育ち、小学校6年生の時の集合写真を見ると、同級生39人のうち半分がひとり親世帯で、何かしらの経済的救済を受けていたのです。

高校1年生の時、同窓会があったのですが、けんかをして鑑別所に送られて学校を辞めていた人や、妊娠して高校を辞めた矢先に、旦那さんが服役してしまった女の子もいました。

私が一番仲の良かった友人は、理学療法士になる夢を叶えるために専門学校への進学を目指していましたが、シングルマザーのお母さんが教育費を出すことができず、高校卒業後、夢を諦めて就職をせざるを得ませんでした。

でも、そのお母さんには、彼氏とのデート代はあったのです。

そうした家庭や経済的問題で夢を諦めなければならない環境を、ずっと見てきました。

—そうした環境の中、なぜ李さんは東京大学に入学できたのでしょうか。

李 私が東大に入ることができたのは、恩師の存在が大きかったですね。

みんなと同じ公立中学校に行くつもりだったのですが、小学6年生の秋に先生に呼び出され、「あなたには東大に行くIQがあるから、勉強ができる環境に行かなければいけない。私がお母さんにも伝えておく」と言われたのです。

それをきっかけに猛勉強を始め、なんとか私立の中高一貫校に入ることができました。入学後も勉強を続け、校内で1位を取り続けていたのですが、高校に入って中だるみをしている時に、再び同窓会で恩師に会いました。

勉強への意欲を失っている私に気付いた先生は、「このままではダメだ、塾にぶち込んでやる!」と言ったのです。

東大や京大の高い合格率を誇る鉄緑会という塾があるのですが、その入塾テストが3日後にあるから申し込んでおく、と。「やめてくれ」と思ったのですが、帰宅すると「申し込んだよ」と連絡があり、行かざるを得なくなって、高校2年から入塾することになりました。

そこで直面したのが、校内1位でも、塾では最下位だという現実です。

このとき、身を置くコミュニティの重要性を実感しました。

その後は、周りの刺激もあって猛勉強を続け、なんとか東大に合格することができました。

私は幸いにも、2度も恩師に救われ、先生との出会いで人生が変わりました。また、支援してくれた両親にも感謝をしています。

ただ、東大に入ってから、周りとのギャップに苦勞する日々が続きました。

—どのようなギャップが？

李 18歳までいた尼崎と東大の環境のギャップが、大きすぎました。

キャンパスには、小学校から私立に通っている、言ってしまうと、日の当たる道だけを生きてきたような人たちしかいませんでした。

私のような生き方をしてきた人がいなくて、使う言葉や持っている価値観、見てきた環境が違うことに、すごく驚いたのです。

みんな勉強してきたエリートたちなので、全能感を持っていると感じました。



(写真: Jose Fuste Raga/アフロ)

—まさに、最近話題になった東大の上野千鶴子さんのスピーチですね。与えられた環境が整っていたことを忘れている人が多いと感じたんですね。

李 すごい武器を与えられているのに、素手で闘ってきたと思い込んでいるのです。

努力をすることができた環境自体が恵まれたことで、そうした環境にいられない子どもたちもいることに、目を向けてほしいと思いました。

入る大学を間違えたとも思い、社会の歪みを感じる辛い時期が、1年半ほど続きましたね。

そして、社会の構造に違和感を覚えたもうひとつのきっかけが、地元に戻って参加した成人式でした。

私が成人を迎えた2010年は、まだリーマンショックの影響がある時期でした。

4次受けの工場などで働いている友達が多い中で、仕事が減って、バイトを掛け持ちしている人がいっぱいいたのです。シングルマザーで、3人の子どもがいる人もいました。

幼少時代の家庭環境、教育の質、経済状況……。

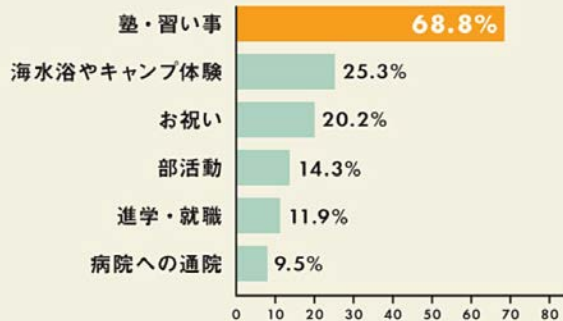
小学校で同じクラスだった時には小さかった差が、大人になると取り返しの付かない差になることが、頭の中で明確になった瞬間でした。

年収が1000万円か2000万円なのかという差ではなく、普通の生活を送る差が奪われている人たちがいるという現実です。

それが、子どもの努力不足の結果なのかというと、絶対に違います。

塾に行きたいけれど、小さい弟の世話をしてないといけな子。習い事をしたいけど、お金がないから無理だと言われる子。その積み重ねで学力が遅れてしまい、いい学校に進学できなくなるのです。

経済的理由で諦めたこと (保護者回答)



出典：公益財団法人あすのば「子どもの生活と声1500人アンケート」2017

それは、個人の責任では決まてないですね。

貧困の連鎖や教育格差、社会構造に違和感を覚え、激しい憤りを感じました。

そうした社会問題に取り組むことこそ自分のミッションだ—。そう確信を持ったのが、20歳が終わる頃のことです。

■5日連続インタビュー vol.2



■5日連続インタビュー vol.3



■5日連続インタビュー vol.4



■5日連続インタビュー vol.5



子どもの貧困に、本質的解決を。



〒160-0022

東京都新宿区新宿五丁目1番1号
ローヤルマンションビル404号室

TEL:03-5357-7131 E-mail:pr@learningforall.or.jp



HP



LINE

週1回情報発信中！



facebook

最新情報を発信中！

HPやSNSでは団体情報をお届け中！

- ◆学生ボランティアインタビュー
- ◆子どものエピソード
- ◆メディア掲載情報

左のQRからぜひご登録ください